

氏 名 今井 昭彦

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 143 号

学位授与の日付 平成 17 年 9 月 30 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 近代日本と戦死者祭祀

論文審査委員	主	査	教授	安田	常雄
			教授	新谷	尚紀
			助教授	樋口	雄彦
			教授	原田	敬一（佛教大学）
			教授	孝本	貢（明治大学）

## 論文内容の要旨

近代日本における戦死者祭祀（慰霊）の問題は、いわゆる「靖国問題」に象徴され、この問題は今や国際問題にまで発展した。そしてこの問題をめぐる議論は、一般に憲法上の、政教分離をめぐる問題として議論されてきた。しかしながら、靖国神社そのものの本質に関わる問題、つまりその起源や歴史的機能・役割については、殆ど議論の対象外にされているように思われる。本論文はこうした状況の中で一体、靖国神社とは何であるのか、あるいは近代日本における戦死者はどのように祀られたのかを、とくに宗教社会学・民俗学的視点に立脚し、広義の社会調査（フィールドワーク）を重視して、歴史的に解明しようとするものである。

とくに実地調査にあたっては、文献資料のみではなく、それまで研究資料として顧みられなかった、慰霊碑などの金石文の収集に努め、これを第一次資料として活用している。また、近代日本における戦死者といえば、日清・日露戦役以来の、対外戦争における戦死者を指す場合が一般的であるが、近代日本はいわゆる戊辰の内戦で幕を開けたのであるから、明治初期の内戦における戦死者をも重視し、それ以後の対外戦争における戦死者と区別した上で、両者を検討の対象として設定する。

近代日本における戦死者祭祀の方向づけを決定したのは、まず日本人同士が戦った内戦においてであった。そもそも靖国神社の起源は、明治2年6月創建の東京招魂社であり、ここには戊辰戦役以来の政府軍戦死者（西軍）のみが祀られた。したがって、反政府軍戦死者（東軍）は「朝敵・賊軍」として、一般に国家による祭祀の対象とはならなかった。本論文の第一部は、「内戦における反政府軍戦死者の祭祀」についての検討であり、この「朝敵・賊軍」といわれた戦死者がどのように扱われたのかを、事例研究をもとに分析したものである。とくに内戦における戦死者祭祀については、現在、研究者の関心が殆ど及んでいない、未開拓の領域といえるのである。

第一部での具体的な事例研究としては、越後小出戊辰戦役（慶応4年閏4月）、会津戊辰戦役（慶応4年8月～明治元年9月）、己巳戦役（箱館戦争、明治元年10月～明治2年5月）、佐賀の乱（明治7年2～3月）、神風連の乱（明治9年10月）の、5例についての検証である。

たとえば戊辰戦役の天王山といえる会津戊辰戦役において、会津藩氏ら東軍戦死者3000名の遺体は、「朝敵・賊軍」の汚名の下に、半年近くもその埋葬が許可されず、路傍に打ち捨てられる結果となった。漸く埋葬が許可されても、その埋葬や慰霊活動には多くの制約が加えられ、また会津の地および会津人（「会賊」と呼ばれた）は、明治以降、政府から冷遇の対象とされる。東北地方が貧しいという負のイメージは、これ以来つきまとうものであり、また己巳戦役における戦死者800名においても、会津戊辰戦役の場合ほどではないにしても、政府の冷遇の姿勢は一貫していた。

他方、靖国神社に祀られるかどうかということは、極めて政治的な力関係によって決定される実証されている。佐賀の乱の場合、佐賀軍（反乱軍）戦死者216名は、地元の佐賀県護国神社（地方の護国神社は靖国神社の末社であった）に祀られるものの、靖国

神社の祭神にはなっておらず、護国神社との祭祀とは別に、招魂碑が建立され、佐賀軍関係者によって、独自の慰霊活動が展開されている。一方、熊本での神風連の乱の場合、神風連（反乱軍）戦死者 123 名は、地元の熊本県護国神社および靖国神社の祭神となつて、国家祭祀の枠内に組み込まれている。これは特異な例であるが、神風連には首領の太田黒伴雄を初めとして神官関係者が多く、このことが明治百年を期してとはいえ、靖国神社への合祀にまで至ったと考えられる。

次に第二部は、「対外戦争における戦死者の祭祀」に関する検討であり、主として群馬県下および北海道での事例をもとに、考察している。キーワードとしては招魂碑・忠魂碑・忠霊碑、あるいは「地方の靖国」たる護国神社等が挙げられるが、戦争が社会に与えた影響力からしても、また戦死者の数からしても、事例研究は内戦における場合よりも、当然広がりをもつことになる。

たとえば札幌では、西南戦役（明治 10 年）で戦死した屯田兵（政府軍）戦死者 36 名を祀る、「屯田兵招魂之碑」が明治 12 年 5 月に建立され、これが起源となつて札幌招魂社となり、さらに現在の札幌護国神社へと発展する。つまり招魂社を媒介に護国神社へという発展過程が確認できる。この屯田兵戦死者は靖国神社にも合祀されるが、この招魂碑の発展過程は、内戦から対外戦における地域社会の戦死者を取り込んでいく過程でもあり、「地方の靖国」が形成されていく一つの典型であった。また戊辰戦役において出兵した上州館林藩（政府軍）は、39 名の戦死者を出し、この戦死者が明治 2 年 9 月建立の招魂祠に祀られて（やがて靖国神社の祭神ともなる）、この招魂祠に、対外戦争における戦死者が徐々に合祀されていき、「地方の靖国」が誕生していくのである。

他方で慰霊施設は、護国神社以外にも多様な形態が存在した。代表的なものは、「ムラやマチの靖国」といわれる忠魂碑・忠霊碑であるが、忠魂碑の出現は一般に日露戦役であり、それまでは戦死者個人碑という形をとる。つまり日本の命運を賭けた日露戦役は、ムラやマチにおいても戦死者の共同祭祀という形態を生み出し、招魂社制度も整備されていく。そして昭和期に入ると、国内において忠霊塔の建設が一般化する（ただし外地においては、忠霊塔は日露戦役後に中国大陸に建設されている）。忠魂碑には戦死者の遺骨は納められず、魂のみが祀られたが（靖国神社も魂のみを祀った）、忠霊塔は「遺骨を納める墓」であるとされ、とくに陸軍主導によって、その建設が推進された。ここに戦死者をカミとして祀るのか、それとホトケとして祀るのかという、祭祀上の大きな問題が発生していくことになる。

内戦における反政府軍戦死者は、基本的には国家レベルとは別の次元で、あるいは別の祭祀形態で、地域社会で祀られた。一方、対外戦争における戦死者は、国家レベルで祀られるとともに、地域社会でも祀られ、重層的な祭祀の対象となった。ただし重層的な祭祀の対象になったとしても、「国の論理」と「地域の論理」というべきものの中で、祭祀上の齟齬がしばしば生じる結果ともなった。いずれにしても、どのような戦死者を、どのように祀るのかという問題は、近代日本の社会を考察する上で、極めて重要な問題であると考えられる。

## 論文の審査結果の要旨

論文公开发表・口述試験、及び論文審査委員会は、9月5日（月）、大会議室において、審査委員5名の出席の下、関係者の聴聞するなかで行われた。

今井昭彦氏の提出論文「近代日本と戦死者祭祀」は、近年学会でも注目を集めている近代日本の戦死者祭祀を対象に、宗教社会学及び民俗学的視点の両面から、その実態と意味を明らかにしようとした論文である。特に実地調査を重視し、文献資料に止まらず、忠魂碑・忠霊塔などの金石文資料を駆使した実証に、方法的特徴がある。全編2部10章で構成され、第1部では幕末から明治初年の「内戦における反政府軍戦死者の祭祀の実態が究明される。また第2部では、日清・日露戦争から十五年戦争にわたる対外戦争の戦死者の祭祀が追跡されている。

まず、今井昭彦氏の口頭発表が行われた。それに続き、審査委員から口頭発表、及び提出論文について、学問的評価を含めた質疑が行われた。

審査委員が、一致して高い評価を与えた点は、次の3点であった。

- ① 本論文における最もすぐれた特徴は永年にわたる実地調査に基づく実証研究という点にあり、これにより今後の学問的議論の礎石をおいたと評価できる。また方法的には、文献資料だけではなく、慰霊碑などの金石文資料を丹念に収集し、それを第一次資料として駆使している。
- ② 内容的には第1部の「内戦」における反政府軍戦死者の実態分析は、旧来の研究史の空白を埋める貴重な業績であり、本論文のオリジナルな点である。対外戦争の戦死者祭祀については最近研究が進展してきたが、「内戦」の戦死者の実態についてはほとんど研究が存在しなかったからである。しかも反政府軍戦死者の祭祀を禁圧するという実態がのちの靖国神社を頂点とする近代日本の戦死者祭祀を方向づけていったと説かれる。つまり「祀るもの／祀られぬもの」の分断が天皇制国家形成との関連で一層明確に主題化された。
- ③ こうした実地調査を通して、近代日本の戦死者祭祀に関する多様な論点が提示されていることである。たとえば(a)「クニ（藩＝地域）」への忠誠と国家への忠誠の相克、(b)「家のホトケ」意識と「国家のカミ」意識との相克などの矛盾を内包しつつ展開したことが示され、今後の議論に貴重な一石を投じている。また神風連の戦死者が明治百年の年に靖国神社の祭神となって復権する事例に見られるように、このプロセスのなかに隠れたポリティックスが起動しているという興味深い論点も提出されている。こうした多様な刺激的論点の提示が本論文のすぐれた点である。

また、今後の研究課題として、主に次の2点が指摘された。

- ① 本論文では、群馬県を中心に、会津・越後・函館・熊本・佐賀・北海道などの実地調査がその基礎

となっているが、前述の国家への忠誠と地域への忠誠との矛盾などはさらに掘り下げる必要があり、また地域差や地域の歴史認識との関わりなども踏まえた地域との関わりをさらに究明する必要があることなどが指摘された。これらはより広い実態調査をふまえた今度の課題である。

- ② また前述の神風連の事例に見られるように、戦死者祭祀がもつ戦後のポリテックスとの関わりと

いう興味深い論点が提示されているが、これについては、戦前の戦死者祭祀の論理と区別した上

で、戦後政治の論理との関わりで究明することも今後の課題である。

発表会、口述試験のあと、審議に移り、本審査委員会は、全員一致で、今井昭彦氏の提出論文が、学位論文にふさわしいものであるとの結論に達した。